神は共におられる　　マタイ 1:22,23

先日、アフガニスタンで亡くなられた中村哲先生がクリスチャンであったことは多くの方々、特に教会で知られています。その中村先生の愛唱聖句が今日の 23 節「見よ、処女がみごもっている。そして男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」（訳すと、神は私たちとともにおられる、という意味である。）であると、あるラジオ放送で話されていました。何でも、日本と国際電話をしている中で、このみことばが語られた時に沈黙が続き、先生が涙ぐんでおられたそうです。恐らく、インマヌエル（神は私たちとともにおられる）遠く離れたところにおいても神が共にいてくださるという約束が大きく中村先生を支えたのだと思います。今日はこのインマヌエル（神は私たちとともにおられる。）昔の訳ですと「神、我らと共に居たもう」このことについて聖書から理解を深めたいと思います。

１．はじめから共におられる神

産まれてくる子どもの名前が「インマヌエル」「神は私たちとともにおられる」というのです。「共におられる神」、これは実に、救い主にふさわしい名前です。救い主がどんなに素晴らしいお方であっても、わたしたちの手の届かないところにおられたなら、わたしたちは救い主の知恵に導かれ、その力に助けられ、その愛に支えられ、その恵みに生かされることはありません。私と共に神がいてくださるのです。救い主は「共におられる神」と呼ばれますが、じつは神はもとから「共におられる神」でした。どこかから助っ人として神様が現れ、共にいてくださるということではないのです。そして創世記にあるように、神は人間だけを「神に似た者」「神のかたち」に造られました。「神は人をご自身のかたちとして創造された」創世記 1:27　それは人格的に造られたとも言えます。神が人格的なお方だからです。人格的に造られているということは人間は神との交わり、人との交わりが必要不可欠であるということです。あらゆるものに恵まれていてもどんなに楽しいことを求め、それを得たとしても神と人との交わりが無いなら、私たちの魂は飢え乾いたままです。先日、来日したローマ教皇が東京で青年達を集めたミサ（礼拝）を持ちました。その集会のレポートを読みましたがテーマは「ゾンビの国・日本に送ったことば」（世界一他人に冷たい国に伝えたい事）というものでした。ここでゾンビとは生きているけれども死んだ状態であるような人という意味で言われています。「表面上は発展していたとしても、内側では、疲弊し、本物の命や生きる力を失い、中身の空っぽな人形のようになっている。笑い方を忘れた人、遊ぶことのない人、不思議さも驚きも感じない人がいる。まるでゾンビのようで、彼らの心臓は鼓動を止めている。」そしてこう言います。私たちにとって最も大切なことは、何を持っているか、何を得られるか、ではなく、誰と（人生を）共有できるかということなのだということに気づくことだ。自分に問いなさい。「私は何のために生きるのか」ではなく、「誰のために生きるのか」「私は誰と人生を共有するのか」を。私たちは自分の殻から抜け出て、他人に心を向けなければならない。特に助けが必要な人に。自分の姿にばかりとらわれないことだ。鏡の中の自分を見つめていれば、鏡は壊れてしまうのだ。」こうして現代人の孤独の問題に言及しています。「誰も分かってくれない」「神様は私のことなんか気にかけてはいない」ではその人は「誰かのことを分かろうとしているでしょうか？」「神様のことを気にかけ、信頼しているのでしょうか？」

最初から神は共におられるのです。さらに言うなら神がおられるところに私たちにいのちが与えられ、私たちがいるようになったのです。神を遠く感じたり、おられないように思うのは神がどこかに行ったのではなく、私たちが神に目を向け、神の前にへりくだろうとしないからかもしれません。もう少し平たく言うなら、私が頑張っているから生きているのではなく、生かされて今があるということです。

「神が共にいてくださる」とは先ず神がおられて、それからこの自分がいのち与えられ、存在している。ですから創造主なる神がこの私を目的と意味をもって置いていてくださるのです。私たちに大切なのは共にいてくださる神様を覚えて生きるという神様との交わり、つながりなのです。

２．罪びとと共におられる神

さて、エデンの園の環境を守るのに、人の手が必要だったように、神と人とのまじわりを保つのにも、人間の側の神への愛や従順、信頼や誠実が必要です。ところが、アダムとエバはそれを失くし、罪を犯してしまいました。それまで神の顔を仰ぎ見て礼拝していたふたりは、罪を犯した後「神である主の御顔を避けて園の木の間に身を隠した」創世記 3:8 のです。では、神もまた人の顔を避け、人から身を隠されたのでしょうか。いいえ、神は、アダムとエバに「あなたはどこにいるのか」創世記 3:9 と呼びかけておられます。罪を犯して、神から遠ざかっていく人間を、ご自分のほうから探し求めてくださったのです。人が神から去っても、神は決して人から去っては行かれません。わたしたちの神、わたしたちの救い主は罪びとを追いかけ、罪の深みにまでも降りてきてくださるお方なのです。

そのことは、救い主が家畜小屋で生まれたことの中に表わされています。イエスがお生まれになったのはふつう「馬小屋」と言われていますが、当時、馬は兵士が乗るもので、民衆はロバに乗りました。農耕には牛が使われましたので、イエスは「牛小屋」あるいは「ロバ小屋」で生まれたというのが正確かもしれません。牛小屋、ロバ小屋いずれにせよそこは「汚いところ」「暗いところ。」「臭いところ。」そんな汚くて、暗くて、臭いところに、イエス様は生まれてくださったのです。考えてみますとローマ皇帝の税金や戦力として人を管理しておくための人口調査、それは人間の飽くなき権力と権威の追求から来ています。また儲けや得にならないなら関わろうとしない宿屋の主人たちの冷たい心、そういったものがつながって結果的に家畜小屋で救い主が誕生することになったわけです。ですから馬小屋の汚さ、暗さ、臭さは、そのまま人間の心の汚さやこの世の暗さ、罪が放つ悪臭を表わしていると言えるのではないでしょうか。だれもそんなところに行きたくありません。しかし、救い主は人を愛して、そんなところにまでも来てくださったのです。どこまでも罪びとと共にいてくださるのです。

1963 年のことですが、東京都台東区入谷町で当時四歳の村越吉展ちゃんが誘拐され、身代金が要求されるという事件が起こりました。吉展ちゃんはその日のうちに殺され埋められました。犯人の小原 保が捕まったのは、二年後でした。その時、犯人の母親トヨさんは、次のように話したというのです。

「村越様、ゆるしてください。わしが保を産んだ母親でごぜえます。…保が犯人だというニュースを聞いて、吉展ちゃんのお母さんやお父さんにお詫びに行こうと思ったけれど、あまりの非道に足がすくんでだめです。ただただ針のむしろに座っている気持ちです。

…保よ、だいそれた罪を犯してくれたなあ。わしは吉展ちゃんのお母さんが吉展ちゃんをかわいがっていたように、おまえをかわいがっていたつもりだ。おまえはそれを考えたことはなかったのか。

保よ、おまえは地獄へ行け。わしも一緒に行ってやるから。それで、わしも村越様と世間の人にお詫びをする…。どうか皆様、ゆるしてくださいとは言いません。ただこのお詫びを聞き届けてくださいまし。…」 トヨさんは「保よ、おまえは地獄へ行け。わしも一緒に行ってやる」と言いました。罪を犯した息子であっても、そこが地獄であっても付き添ってやりたいという母親の愛を感じる言葉です。しかし救い主キリストの愛は、母親の愛に勝って深くわたしたちを愛してくださっています。わたしたちが自分の罪のために苦しむのを「自業自得だ」と冷たく見放しはなさいません。その苦しみを共にするために、この世に来てくださったのです。

クリスマスの賛美に讃美歌 124 番「みくにをもみくらをも」という歌があります。あとで賛美しますが 1）御国をも宝庫（みくら）をも　あとにすてまして　くだりにしイエス君を　うくる家あらず

住みたまえ、きみよ　ここにこの胸に

イエスがお生まれになったとき、宿屋には部屋がありませんでした。それでイエスは汚く、暗く、臭い「馬小屋」にお生まれになったのです。神の光に照される時、わたしの心も「馬小屋」のように汚く、暗く、臭いかもしれません。でも、イエス様、わたしのこの心にお生まれください。そして、わたしをきよ

め、照らし、いのちの香りを放つ者としてください。この歌詞はそんな祈りなのです。「こころをきよめてから、身辺を明るくしてから、香り高い人格者になってから、イエスを迎え入れます」というのではありません。それならイエスを迎えるのはいつのことになるか分かりません。おそらく生涯出来ないでしょう。自分に罪があるからこそ、それ赦し、きよめていただく。そのために救い主をお迎えするのです。救い主は、罪あるわたしたちのところにまで降りてきて、罪ある者と「共にいてくださる神」なのです。

３．永遠まで共におられる神

救い主は、「インマヌエル」、「共におられる神」です。わたしたち罪ある者と共に、しかも一時的にではなく、永遠までも共にいてくださるお方です。ヨハネ 1:14 に「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。」とあります。「ことば」とはキリストのことです。「わたしたちのうちに住まわれた」とは、文字通りは「テントを張る」という意味です。アブラハム、イサク、ヤコブといった信仰の父祖たちはみなテント、幕屋に住みました。それで「テントを張る」という言葉は、そこに「住む」、「定住する」ことを表わしています。救い主はほんの少しだけ私たちを訪れてくださる「訪問者」ではなく、「住人」として、私たちとずっと共にいてくださるのです。

キリストは、復活の後、天に昇られる前、「見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます」マタイ 28:20 と弟子たちに約束されました。キリストは天におられると同時に、今、私たちとともにいてくださるのです。やがて、救い主をこの目で見る時がやって来ます。その時次の約束が成就します。「そのとき私は、御座から出る大きな声がこう言うのを聞いた。『見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、
彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。』」黙示録 21:3-4 神はわたしたちのうちに住み、わたしたちは神のうちに生きるのです。

年末を迎えていますが皆さんの中にはまだ心の痛みや悲しみを拭い切れないでいる人があるかもしれません。まだ解決されていない問題があり、これからの人生の闘いに不安を感じている人もあるでしょう。しかし、みことばに「聞け。イスラエルよ。あなたがたは、きょう、敵と戦おうとしている。弱気になってはならない。恐れてはならない。うろたえてはならない。彼らのことでおじけてはならない。
共に行って、あなたがたのために、あなたがたの敵と戦い、勝利を得させてくださるのは、あなたがたの神、主である。」申命記 20:3-4「あなたがたの神、主が共に行かれる」とは、なんと心強い言葉でしょう。「共におられる神」、イエス・キリストがこの年末も、迎える新年も「共に」歩んでくださいます。このお方と共に歩むなら、わたしたちは明日を恐れることはないのです。

「見よ、おとめがみごもって男の子を産む。その名はインマヌエルととなえられる。」救い主は、赤ん坊となって世にこられました。赤ちゃんは無力に見えますが、人を惹きつけ、人の心を素直にし、和らげる大きな力を持っています。貧しい羊飼いたちや、今までイスラエルに縁もゆかりもなかった東方の博士たちでさえ赤ちゃんのイエスに近づくことができたのです。私たちも、羊飼いたちのような素直な心、博士たちのような求める心さえあれば、救い主に近づくことができます。救い主イエス・キリストを、自分の心にお迎えするとき、イエスは、どんな時でもあなたと共におられる神、あなたの「インマヌエル」となってくださるのです。

一年を振り返ると、恵まれた時ばかりでなく、苦しかった時も思い起こされます。もし、その時、イエス・キリストが共におられなかったら、どうなっていたことでしょう。そう思うと、主への感謝があふれてきます。この感謝を忘れず、この年末、新しい年に向かって、「共におられる神」、イエス・キリストにいよいよ信頼を寄せて歩んでまいりましょう。